<table>
<tr><td>業　　種</td><td>海運（貨物）</td></tr>
<tr><td>取組分野</td><td>（７）事故、ヒヤリ・ハット情報等の収集・活用</td></tr>
<tr><td>テ ー マ</td><td>ヒヤリ・ハット情報として「仮想」事例を収集し活性化に繋げる取組</td></tr>
<tr><td>取組の狙い</td><td>ヒヤリ・ハット情報において「実」事例に加え、「仮想」事例についても収集することで、日々の業務の中での些細なことも報告してもらえるよう報告への意識を身近に感じさせることを期待し、収集の活性化を図る。</td></tr>
<tr><td>具体的内容</td><td>１．新日本近海汽船株式会社では、運航各船が提出する「ヒヤリハット事例報告書」において、実際に発生したヒヤリ・ハット事象を報告する場合は「実」、実際には発生していないものの、報告者が想像した潜在的リスクを報告する場合は「仮想」のいずれかを選択。

【「仮想」ヒヤリ・ハット報告の例】
<table>
<tr><th>区分</th><th>トラブル現象</th><th>対策</th></tr>
<tr><td>甲板部</td><td>夜間、大阪湾を航行中、無灯火の漁船がレーダーにより探知された。
すぐに進路を変更し接近を回避したがヒヤリとした。</td><td>見張りの配置・増員を行う。
レーダーワッチを徹底する。
乗組員に対し、見えない危険があることを想定するように教育する。</td></tr>
<tr><td>機関部</td><td>電動ドリルを使用中、電源コードが擦れて断線しかけていた。
気づかずに使用すれば、感電事故に繋がる可能性がありヒヤリとした。</td><td>使用前に電源コードの状態確認を行う。
破損している場合はすぐに交換する。</td></tr>
</table>
２．ヒヤリ・ハット情報に「仮想」を含むことで、日々の業務の中での些細なことも報告してもらえるよう船員におけるヒヤリ・ハット情報報告への意識を身近に感じさせることを期待し、潜在的危険を事前に想定することで実際にリスクを回避しているとみられることから、事故等の未然防止にも寄与しているものと認識。</td></tr>
<tr><td>取組の効果</td><td>・ヒヤリ・ハット報告件数が年間１００件以上と大幅に増加。
（平成３０年頃　年間１０～２０件程度）
・ヒヤリ・ハット報告の多い船主・船舶は、無事故表彰の対象となっている船舶が多く、事故の発生率も低下している傾向。
・ヒヤリ・ハット情報において「仮想」事例についても収集することで、報告者の取組姿勢をポジティブマインドへ転換させ、収集の活性化に繋がっているとともに、報告者が能動的に潜在的危険の掘り起こしを行うことが自らの危険回避への姿勢に表れることで事故の未然防止に寄与。</td></tr>
<tr><td>事業者名</td><td>新日本近海汽船株式会社　安全管理部
（連絡先：０７８-５９９-９６８３）</td></tr>
</table>